

美馬市美馬町の暮らしの変遷

—地域に根ざした生活—

民俗班 (徳島民俗学会)

澤田 順子*

要旨：国民性・県民性・市町村民性などと大きく人々をまとめて語られることが多くある。家毎の暮らし方の違いにあるとはいえ、地域の状況を見ると、それぞれがその地域の風土にあった暮らし方を工夫し、生活しているのが分かる。民俗調査を続けるなかでそれぞれの地域ごとの暮らし方の違いを見つけ、どこから派生しているのかを探る楽しみがある。昨年度の学術調査は同じ美馬市木屋平であった。同じ市内であっても、吉野川を隔て南岸の木屋平と北岸の美馬町との暮らしはどう違うのか、土地の利用の仕方と食生活について調査することにした。

キーワード：風土と暮らし、食生活の移り変わり

1. はじめに

美馬町には国指定史跡が2カ所ある。「段の塚穴」と呼ばれる6～7世紀の古墳と白鳳期に建立された四国最古の寺院「立光寺 郡里廃寺跡」がある。寺町には安楽寺(浄土真宗)・願勝寺(真言宗)など立派な寺が並び、高い文化の歴史を誇る由緒ある町だ。

藩政時代は幕府に農民の生活は束縛され、美馬町の農民も統制された生活を強いられていた。食生活も米を食べず雑穀を食すよう干渉されている文書『慶安御触書』などが残されている。

大正期まで、住民の生業はほとんどが農業であり、商工業者も農業との兼業であった。大正末期になり電気の敷設が進むと製糸業なども営まれるようになり、町民生活に変化が現れている。農民が自分の生活を本当に自分で決めるようになるのは終戦後農地開放が行われ、土地を自分の所有物とするようになるまで待たなければならなかった。

郡里地区は吉野川左岸阿讃山脈を背に東に野村谷川、西に鍋倉谷川に挟まれた扇状地、山地と段丘と

沖積平野からなっている。明治初年郡里村は郡里山村と郡里村に分かれたが、明治22年に再び合併、郡里村になり、昭和15年に郡里町となった。

重清地区は郡里の西に位置し、こちらも農業従事者が多く、一時藍作を盛んに行った時もあった。昭和32年郡里町と重清村が町村合併し、美馬郡美馬町となった。

同じ市内でも美馬町は四国山地で南を遮られている吉野川右岸の木屋平地域などとは違って、讃岐山脈を背に南側が開けているので日当たりがよい。「囲炉裏文化ではない。美馬の家には囲炉裏は無い」と聞かされた。日当たりの良い山は杉・ヒノキは適さず落葉樹が育つ。そのため落ち葉で堆肥ができて土が肥えている。作物の種類も多く、山間蔬菜のエンドウ・トマト・インゲンなどが作られている。

今回の調査では大正5年生まれを筆頭に昭和世代まで、自分の生活体験を快く話してくれたので、聞き取り調査は和やかに行うことができた。美馬町内の地域性を表すため旧郡里山地区、旧郡里地区、旧重清地区に分類し事例を挙げ『美馬町史』・『郡里町

* 徳島市丈六町長尾62-8

史』・『重清村史』等を参考にまとめることとした。

2. 暮らしの移り変わり

1) 郡里山地区

ヘアピンカーブの続く山道に沿って家屋が点在している。明治8年郡里山村549戸、田の面積は小さく、傾斜地なので棚田で米を作っているが収穫量は少ない。大切な米は特別な紋日に食していた。

山分のタバコは質がよく換金作物としてタバコは生活を支えた。阿波葉は天日干しにし、刻みタバコになった。昭和30年～60年ころが最盛期であったが今は衰退している。養蚕も行われ桑が植えられた。現在の主たる産業は養鶏、美馬町内に処理場もある。しかし、高齢化により廃業する家もあり、規模も縮小してきている。

事例1 (大正6年生, 入倉) 大正12, 3年ごろ県道が開通し、讃岐との交流が盛んになった。相栗峠を越えて塩江へ、借耕牛の往還の道でもあったし、屋島まで塩を買いに自転車で行ったこともあった。「借耕牛の最盛期昭和10年ころ郡里・重清合わせて牛の飼育頭数893頭の内、貸出数は310頭にもなった。」(『美馬町史』p872参照)

事例2 地域で行われていた祭り・七夕・八朔祭り・盆・盆踊りなどは終戦を境にだんだんと廃れてしまった。若者が都会から帰ってきていた昭和20年から30年ころは盆踊りなど復活していたが、その後次第に無くなった。

2) 郡里地区

郡里の地名の由来は7世紀に郡衙ぐんががあったことに起因し、当時この地方の政治の中心であった。吉野川の川沿いでは水田で米を耕作したが、北岸用水が開通するまでは田の水引は盤水(時計で時間を決めて順番に水を入れる)を行った。農業が主体で、現在も蔬菜類を作っている。美馬町全体にわたって地域の電化が進むにつれ精米所・製糸業・製材所もでき、島は桑畑と化し、養蚕が盛んに行われた。女性たちは糸繰りの工女として働いた。第1次世界大戦後の不況でマユの価格は暴落、不安定な産業となった。

事例1 第2次大戦時の労力不足、終戦後の食糧不足による増産・供出が課せられ養蚕どころではなくなった。食料の強制的な供出が無くなるとまた養

蚕は復活したが、今度は中国の安い絹製品に押され低迷してしまった。

事例2 高度経済成長により兼業農家が増えた。農業は主ではなくなり、年寄りと母ちゃん支えられていたが、女性も外で働くようになり専業農家は減り、農作業にかけける時間も減った。

事例3 美馬町全域に言えることだが、三頭トンネルの開通など道路整備で讃岐が近くなり、高松空港の利用、香川県内企業に就職をするなど讃岐との交流が深まっている。また徳島自動車道にはバス路線も開通し、大阪・神戸など近畿へ行く機会が増し文化を吸収する範囲が広がっている。

3) 重清地区

郡里山地区と同様に山分ではタバコを作っていた。吉野川沿いの沖積地では藍作が行われていたが、藍の衰退により作付けは減少した。その後ここでも桑を植え養蚕が行われている。「大正9年中筋に日之出製糸工場ができ、女子工員約100名、住み込みの女工さんで賑にぎわった。昭和14年戦時企業整備により撤収された」(『美馬町史』参照)

事例1 (大正14年生) 境目地域で何が町を発展させたかを聞くと「道路・道幅は狭くても農道が沢山できたこと」と話した。人との交流も簡単にできるようになったという。

高齢になると田畑を耕せないで、他人に預け耕作してもらい、1反で2俵を貸地料として貰う。モーターで地下水を汲み上げる水利代(1反で1万円)は地主が払うことになっている。

事例2 (大正5年生) 中島地域は吉野川の川中島で南岸の半田町の飛び地であったが、昭和9年43戸が重清村に編入した。洪水がある度に家は天上まで水に浸かる。洪水が予測されると、まず飲み水を、次にご飯を炊いて食料を確保する。島の中では伊射奈美神社が一番高い所にあるので年寄り、子どもは避難した。「氏神さんのお陰で家を流された人はいなかった。今でも毎年お祭りをしていて対岸の半田町毛田の人たちと交代でおみこしを出している」という。

洪水は肥沃な土壌を運んで来てくれ、柔らかな根菜類、蔬菜ができていたが、洪水を避ける堤防工事のため20年前に島を離れた。

3. 食生活の変遷

「藩政時代の農民に課せられた食生活に関する幕府のお触書〔『慶安御触書』慶安2年(1649)〕には一、百姓は常に雑穀を食うこと。みだりに米を食ってはならない。

一、うどん・そば・そうめん・饅頭^{まんじゅう}・豆腐等は五穀の費えになるから売買してはならない。

一、酒は一切造ってはならない。町へ出て酒を飲んではいけない。

阿波藩でも、幕府の方針に従い、更に細目を加えて領内に布令し、庄屋・5人組を通じてあまねくこれを百姓たちに知らしめた。〔『美馬町史』p385参照)と書かれている。

農民たちは昭和になっても雑穀・麦飯を食べ続けていた。

1) 主食

美馬町全域が麦を主食としていた。丸麦をよます(丸麦を2度炊きすること)。二度目に炊くとき、一升の麦の上に1合の米を交ぜ合わさないうで真ん中に入れる(2合とか多めに入れることもある)。「汁引き」という。これは米を入れると汁気を吸い、麦にまるやかさが出るそうだ。残った冷や飯を食べるために野菜を入れおみいさんにした。

炊き上がった米の部分は年寄り用とか弁当に入れたそうだ。米が常食となったのは昭和35年ころからである。麦のご飯は腹持ちが悪く、日に4食が普通だった。日照の長さで労働時間が異なり食事時間も変わるが、大体次のようであった。

6時ころ 朝飯 麦飯・味噌汁・コンコ(漬物)・残り物
 10時ころ めし 麦飯・イモなど野菜の煮物・コンコ
 3時ころ 茶の子 いも ツルカン(ゆで干し芋)
 7時ころ ようめし(晩飯) 味噌汁・煮物・和え物・コンコ

昭和30年代になって企業で働く人が多くなると、このような食事形態は崩れ、1日3食へと変わっていった。

正月とか祭りに米の飯を食べるのがご馳走だった。

事例1 郡里山・重清の山分は似通った食生活だ。特に主食は丸麦が主で丸麦だけのご飯を「すば

く(素麦)」、麦と米が半々を「はんぱく(半麦)」といい、はんぱくは上等だった。昭和21年ごろ押し麦が出回ったが、丸麦の方が良いという人もいた。

切久保では10件に1件が米の作付けをしていた。米と麦を交換し、米の食べ伸ばしをしている。

麦・タバコの後にソバを植える。ソバの後に大豆や小豆と畠は有効に使った。ソバごめと米は同格で交換できた。野菜や豆腐を入れイリコ出汁のホウヘンやそば切りにして食べた。

アワ・コキビ・タカキビは餅用に作る。アワは1年に3回収穫できる。

さつま芋は、一時だけですぐ腹が減る。イモの粉でそうめんを作ったがおいしくなかった。

事例2 中鳥 水をモーターで汲みあげるようになり米は良く採れた。しかし、米は売れるから麦をよまして食べた。

事例3 境目(中筋)(大正14年生)昭和21年ころまで丸麦をよまして米を入れ食べたが、水を田に入れることができるようになって米が採れるようになった。弁当も米のご飯、米ばかり食べるようになった。

お餅のあるときはしょうゆの付け焼きのべんとうに持っていった。おいしかったそうだ。

2) 副食・調味料・常備菜

みそ・しょうゆ 各家で昭和40年ころまで作っていた。味噌は麦みそ、ねさし味噌だった。今は作っていない。

常備菜 コンコ(沢庵)は沢山漬け、1年中食べることができるようにしていた。ショイノミはしょうゆを絞った後にできるが、食用には別に作るほうがおいしかった。

副食 ダイコンやジイモ・ナス・キウリなど、季節によって取れる自家製の畠物ばかりを煮物や酢の物にしていた。サトイモを大釜で炊いて自家製の味噌をつけ田楽にしたのはおいしかった。

中鳥では、カンドリ舟で漁に出たおじいさんを岸辺で待っていて鮎を焼いて食べた。鮎捕りの商売をする人はいなかった。

配給で塩物や雑魚が来るのを待っていた。

道路が整備され給与生活者が増えた昨今では、食生活の形態がすっかり変わり、食料品はマーケットなどで買うものとなっている。マーケットの近くに

住む人は便利で「冷蔵庫が傍にあるようなもの」と語ってくれた。

3) 紋日の食べ物

普段は自給自足の生活であっても紋日、特別な日には特別なご馳走を造り生活にメリハリをつけていた。どんな食べ物が楽しみだったかを聞いたとき「白のお米のご飯」という返事が多かった。厳しい農家の食生活を体験してきた人たちにとって、食べたい物が何でも手に入る現在、待ちわびた紋日への思いはなくなってしまったようだ。毎日がハレの日でケの日が無くなったともいえる。

①正月 オオツゴモ(大晦日)、正月の行事の様子は昨年調査を行った木屋平の今丸地区と良く似ている。オセチは汁物のことである。トーフ・アブラゲなど入れる。お餅は沢山搗く。正月料理にはトーフは欠かせず、何人かで組を作り作っていた。

事例1(中筋)(昭和2年生) 餅を二つ祀るのは「夫婦仲良く」という意味があり、干し柿を6つ串に刺すのは「中睦まじく」という意味があるそうだ。家族全員が揃ったところで正月の挨拶を年長者から始める。煮しめ、雑煮(みそ)、オセチの料理を食べる。飼っている牛にも同様にご馳走をお膳に載せ、家長が食べさせる。

事例2(中宗重)(大正8年生) 年越しソバを打った。お雑煮は味噌、丸く収まるようにと丸餅で3が日の間焼いて食べた。塩鮭を1本吊っておいて来客に切って出す。

②祭り 祭りのご馳走はどの地域の人でも「サカナ寿司」という。木屋平も同様で一番懐かしい食べ物であった。客を招き大層な持て成しをしていた。その祭も若者は土地を離れ、高齢者ばかりになるとお神輿もヨイヤショも担いだり曳いたりできなくなった。まして山道は若者でも大変である。中宗重の洋品屋さんに聞くと「昔は子どもたちがきれいに着飾って店の前を歩いて賑やかだった。ヨイヤショ・屋台・お神輿が店の前を通ったが、今は通る人も居らん。寂しくなった」と話す。

正月の献立より祭りのご馳走の名前の方が次々と出てくる。楽しかった様子が伺える。

事例1(郡里)(昭和9年生) サカナ寿司 アジ・ボウゼ50匹くらい塩をして置いたものを、種酢を5倍

くらいに薄めた中に浸ける。バラ寿司も赤飯も作った。客が来ると甘酒(一斗瓶で作る)と煮しめを出す。寿司などは重箱に入れ親戚に配る。豪勢であった。

事例2(荒川)(昭和17年生) 無塩の魚を食べる習慣は無かったが、祭りには魚屋でアジを買いサカナ寿司・赤飯・煮しめなどを作った。三頭神社の遥拝所で駆け馬の行事があった。今は子どもが主体でお神輿が出る。

事例3(切久保)(昭和17年生) 紋日にはトーフ・コンニャク・山のしいたけでバラ寿司を作った。昭和30年ころ小島から徳島のおっさんが塩鯖の干物・イリコなどを売りに来た。生ものは酢漬だけだった。甘酒は麴から造り一升瓶に入れみやげにした。

4. おわりに

美馬町の多くの方たちに出会った。調査の関係上70歳、80歳代の人たちであるが、明るくとても大らかであると感じた。山地であっても、南の日差しを受けているこの土地柄から来ているのではないかと思った。この地域は安楽寺さんなどの教えを受け浄土真宗の方が多い。本尊阿弥陀様を祀ったお堂の中にはお大師さんも祀られ「大師堂」と呼んで大切に祀っていたりする。それくらい皆を受け入れる包容力があるのかと感じいった。

飛び込みで訪問した先でも快く話を聞かせてくださったり、茶菓のお接待を受けたり、調査の協力者に感謝している。

その上、逢坂俊男、藤島邦照両先生と民俗学会の橋禎男氏にご案内とご助言を頂き、どうにか調査報告書が書けたことを感謝して筆を置く。

協力して下さった方々ありがとうございました。 敬称略

郡里 八木岩雄(大6年)、藤田精一(昭17年)・富子(昭23年)、森長明文(昭4年)、武田一美(大7)、真鍋千恵子(昭14)、真鍋和子(昭9年)、真鍋五郎(大8)・房江(大14)、新田公優(昭7)、松本講知(昭19)

重清 田中 広(昭3)・千恵子(昭2)、田中寿恵子(大14)、城西ツモリ(大5)、逢坂久子(昭9)

文献

美馬町史編纂委員会, 1989(平成元年):『美馬町史』。
美馬町史編纂委員会, 1957(昭和32年):『郡里町史』。
美馬町史編纂委員会, 1917(大正6年):『重清村誌』。